

# 「黒人身体能力神話」浸透度の文化的格差をさぐる

―概念規定と方法論を中心に―

川島浩平

## I 「黒人」とは

アメリカ合衆国（以下アメリカ）に在住するアフリカ系の人々<sup>(1)</sup>は、全人口に占める比率が一二%程度にとどまるにもかかわらず、私たち日本人にとってこの比率をはるかに上回る存在感を放つ民族（エスニック）集団であるとい<sup>(2)</sup>ても過言ではない<sup>(3)</sup>。

アフリカ系の人々は、日本の中等教育の教材では、奴隷制度という非人道的な制度の犠牲者として、あるいは公民権運動として頂点を極める解放運動の闘士として描写されることで、生徒たちに強い印象を与え、テレビ画面や映画館のスクリーンでは、アスリート、コメディアン、ミュージシャンなど文化的活動での傑出した才能の持ち主として脚光を浴び、文化史、社会史、カルチュラルスタディーズなど学術研究では、ステレオタイプの言説や思考の対象

として調査され、分析されてきた。かくして、教育、メディア報道、学問にまたがる多元的なアリーナにおける記述、報道、考察などが、この集団の存在感を著しく高めてきた一因であることは論を俟たない。

アフリカ系の人々を言説化したり表象したりする際に、私たちは様々な語句や表現を用いてきた。例えば、歴史をさかのぼれば、ヨハン・ブルーメンバツハによる古典的な分類の中に「ネグロイド (Negroid)」という用語を見出せるし、<sup>(3)</sup>時代を下って奴隷制廃止に解放された人々の処遇をめぐる政策が国家的な争点となったアメリカでは「ニグロ (Negro あるいは negro)」が流通した。一九六〇年代以降にこの言葉が差別的であるという理由で禁句になってからは、「有色人 (Person of color)」が婉曲表現として採用され、現在も使われることが少なくない。また同じころから、普通名詞として「黒人 (ブラック / black(s))」という呼称が広く流布してきた。多文化主義が支持を受けて定着した一九九〇年代以降には「アフリカ系アメリカ人 (African-American)」が「政治的に妥当」な名称として浸透した。アフリカに出自を有する人々とその子孫に対する呼び名は、時代の文脈に応じて、さまざまに変容を遂げてきたといえるだろう。<sup>(4)</sup>

その呼称の多様性を考慮するなら、考察にあたって、まずこの集団をいかに呼ぶかを定めることから始めなければならない。本論では上のような事情を配慮した上で、敢えて「ブラック / black(s)」の訳語「黒人」を採用するものとした。<sup>(5)</sup>

もちろん、この表現に潜む問題性を等閑に付すつもりはない。この問題を例示するために、最近の報道を引いてみよう。バラク・オバマが大統領選挙に勝利した直後、日本の新聞報道の見出しには「黒人初の大統領」との形容辞が類出した。しかし一週間もすると、「黒人」という語句は、オバマ関連記事から急速に姿を消すようになった。<sup>(5)</sup>これは、各紙がその使用を自粛するに至ったことを示唆している。その理由は、当選直後は、彼の当選の意義を解説する

上で「黒人初」という事実が欠かせないものであったが、やがて、この語句のはらむ問題性を憂慮するようになったからであろうと推察できる。ここでいう問題とは、おそらく特定の人間を、その個性や差異を無視して、一つの色によって表象される集団に所属するかのごとく記述することではないかと思われる。

しかし、「黒人」なる集団がアメリカに、そして他の地域に存在することはまちがいになく社会的現実である。アフリカ系の人々に対する呼称として、アメリカにおいて日常的、一般的にもっとも使用されているのも、「黒人」である。「人種」に生物学的根拠がないことが明らかとなった今日、「黒人」という言葉は、たしかに差別用語として警戒されている。しかしその反面「黒人」は、社会的現実を伴う概念として、日本を含む世界の幅広い地域で使用され、認知されてもいるのである。

こうした点、および他にそれより適切な表現が見当たらないという点に鑑み、「黒人」という呼称の使用はやむを得ないとする立場に立つものとした。

## II 主題と位置づけ

さて、かく呼称の採用を理由付けた上で、本題に入りたい。「黒人」というカテゴリーの実在性を際立たせる要素の一つとして注目すべきものに、運動をする能力があることはよく知られているとおりである。後に検証するように、マスメディアの報道に潜む、黒人と呼ばれる人々に固有の運動能力があるとする暗黙の了解、換言するなら、黒人が本性的に、身体的な遊戯や競技を実践する能力に秀でていたとの想定を看取することはそう困難ではない。一般人の言動に、この了解ないし想定を見出すことはなお容易である。メディアとその読者・視聴者は、黒人は「もともとス

ポーツがうまい」、「生まれつき運動が得意」、「天賦の運動能力や身体能力に恵まれている」<sup>(6)</sup>、「天性のアスリートである」などの言説を生産し続ける点において共犯的な関係にあるのである。

この点を、比較文化的観点から、日本においてそれが顕著であることを強調しつつ言い換えると、次のようになる。日本には、以下で論じるアメリカの場合と異なり、それが差別を内包するという深刻な問題を十分に省みることなく、黒人に固有の運動能力があるとする想定に基づいて堂々と発言をしたり、態度をとったりする人がとても多い。たとえば、短距離種目のような陸上競技のコーチングの現場では、「『黒人の天性』に対抗するには、日本人は『技能(スキル)』を磨く以外にない」という指導方針が一般的であると聞く。<sup>(7)</sup> 逆の立場から、「黒人だから強い」、「速い」、あるいは「負けても仕方ない」という言説が人種差別である可能性を示唆するだけで、「褒めてなぜ悪い」、「事実だから仕方ない」といった反論に出くわすことは少なくない。<sup>(8)</sup> こうした現象を、後の節で定義する概念を用いて、次のように言い直すこともできるだろう。

一般的に、日本人の公的言説空間には、「黒人身体能力」に関する「神話」が氾濫しており、視聴者、読者、発話者、そして対話者は、こうした神話の氾濫の中にあつて、日常的に、みずからの意識や思考の前提と内容を確認し、かつ再生産している。

他方アメリカ、とりわけ教育界では、こうした想定に基づいた言動を「人種主義 (racism)」とみなして、危険視し、警戒し、厳に慎む風潮が広くみられることが知られている。

ここでいう人種主義とは、「ある集団の生得的差異が、その集団の成員の文化的、個人的差異を決定するとする信念や理論」のことであり、人種差別とは、かく定義される人種主義に裏打ちされた言動のことである。これらの定義に基づくなら、アフリカに出自を有するという生得的差異が、「スポーツがうまい」という文化的、個人的差異を決

定するとみなしている点で、たしかにこの想定は人種主義であり、これに基づいた発言は人種差別ということになる。つまり、集団内の差異や多様性を無視して、同集団に所属する成員であればみな、「スポーツがうまい」という文化的、個人的性質を有しているかのごとくみなす点に、差別の前提となる思考が宿っているとされるわけである。

総じて、以上の日米間差異を次のように要約できるだろう。黒人に固有の運動能力があるとする説は、日本においては、ごく一部の人々による批判的意見が顧みられることもなく、正しいものとして受け入れられているのに対し、アメリカにおいては、人種主義的言説として学界では拒絶され、社会では大きな争点を成している。本論の主題は、このような国家間、あるいは文化間の差異が生じる原因をさぐる研究の手始めとして、分析の基礎となる概念を規定し、方法論を説明することにある。この研究は、より大きなプロジェクトの一環として位置づけられるものである。

ここでいう、より大きなプロジェクトとは、武蔵大学総合研究所による助成を受けたプロジェクトA（研究テーマ：アメリカ合衆国における運動能力・身体能力の人種間格差に関する言説・表象とその社会的影響）のことである。このプロジェクトがテーマに掲げる「運動能力・身体能力の人種間格差に関する言説・表象とその社会的影響」を理解するためには、日本人の意識や言動との比較的な視座に据えることが有効であると考える。本論を嚆矢とする研究は、そのような視座を構築するために、先の「神話」を取り巻く日本側の環境を調査することを目的としている<sup>9)</sup>。

本節を閉じる前に、やや結論を先取りするかたちで、本研究の位置づけについて付言しておこう。黒人に固有の運動能力があるとの想定が言説空間に存在する点で共通しているとはいえず、日本人はそれをほぼ無批判に受け入れているのに対し、アメリカ人は争点として俎上に載せているという点に差異があることに、今一度注意を促したい。これは、黒人という「人種」の表象が、文化的文脈に応じて、異なるかたちで受け入れられていることを意味する。

つまり逆にいえば、「人種」概念を支える言説と表象が、文化的に規定され、構築されているということである。こうした論点ゆえ、本研究は、人種概念の社会的構築性を検証する作業として位置づけることが可能である。<sup>(10)</sup>

### Ⅲ 文献に見る日米間における意識差

それでは、アメリカにおいて人種主義であると批判され、日本において自明の理であるかの如くみなされる想定は、各国で出版される文献の中でどのように顕在化してきたであろうか。以下では、まずアメリカの出版物の場合から概観するものとしたい。ここでは、現在の環境が形成される直前の状況を調査すべく、一九九〇年代の出版物を振り返りたい。

まず、この一〇年間の初頭に位置する代表的な調査として、一九九一年一二月に『USAトゥデイ』紙が四日間にかけて連載した「人種とスポーツ…神話と現実」と題する特集がある。<sup>(11)</sup> 注目すべき箇所は、連載初日の記事にある。その中で記者は、スポーツに関する俗説の多くが人種的ステレオタイプに依拠したものであると主張し、「アメリカ人の多くは、人種間には肉体的 (physical) な差異が存在すると信じている」と続ける。そしてその証拠として、同紙によるアンケート調査の回答者の半数が、「黒人は生まれつき優れた身体的な能力 (physical ability) を有している」と答えたことを挙げている。

その後出版された次の二点にも注目したい。

九三年に『USニュース&ワールドレポート』誌は、ロドニー・キングの殴打事件やロサンゼルス暴動など、当時人種の緊張関係を高める事件が相続くなか、大学キャンパスにおける人種意識にメスを入れるレポートを掲載した。<sup>(12)</sup>

その中で同誌は、「白人」学生の黒人に対する印象を問い、「カレッジの白人学生の二四%、ユニバーシティの白人学生の三三%が黒人を身体的に恐れている (physically afraid of blacks)」との結果を得ている。このレポートが、本論が焦点とする「黒人に固有の運動能力がある」という想定の見証となるかどうかは、レポートがいう「身体的に恐れている」との状態と「運動能力」との関係、およびそれが黒人を対象とした場合の独特の感情かどうかなど、いくつか詰めて考えなければならぬ点が残るとはいえ、興味深いデータである。

一九九七年には『スポーツ・イラストレイティッド』誌が、八〇年のモスクワ五輪以来精彩を欠き、陸上競技短距離種目の決勝に一人として名を連ねることができないでいた「白人」走者の特集した<sup>13</sup>。同誌は、白人が不利な状況に置かれている理由を多角的に分析するが、その一つとして精神的な原因、つまり「黒人にはかなわない」という劣等感にクローズアップする。ここで紹介される世論調査の結果は示唆的である。「白人男性回答者の三分の一強が、黒人はスポーツにおいて白人よりも攻撃的であり、三分の一弱が、黒人のほうが率直に比べて体格がよく強い (simply bigger and stronger) と信じている」というのである。このデータにも、「体格がよく強い」とことと「運動能力」の関係、それが黒人に固有なものか等、検討すべき課題が残されているとはいえ、ここでは黒人の運動能力に関するアメリカ人の意識をさぐる手がかりとして受け入れておきたい。

以上はいずれもアメリカを代表する日刊紙・週刊誌であり、世論を映し出す上で一定以上の取材力と影響力を有しているメディアである。そのいずれもが三割から五割くらいの間の近似した数値を報告しているからには、これらの割合に少なからぬ信頼を置いてよいであろうと、まず考えたい。その上で興味深いのは、それぞれの記者(『USAトゥデイ』を微妙な例外として)がこれらの割合を高いものとして、つまり半分をかなり下回っているにもかかわらず、白人の人種主義的な意識の高まり、あるいはその強さの見証として提示している点にある。これは人種主義を、

本来なら社会から放逐すべきイデオロギーとみなす前提に立っているからそのことであろう。

しかしここでは、もっと単純に割合そのものに注目して、または次に見る日本人の意識との比較的観点に立って、各紙・誌の示す数値を低いものとみなす立場を敢えて選択してみたい。つまり「半数もの」、「二四%もの」、「三三%もの」、「三分の一強/弱もの人々が」ではなく、「半数だけの」、「二四%だけの」、「三三%だけの」、「三分の一強/弱だけの人々が」と読む立場である。

もちろん、こう読み替えたからといって、全体からこれらの割合を引いた部分が、その反対の立場、つまり人種主義的な思考に批判的な、あるいはそれから免れた人々からなるとみなしているわけではないことはいうまでもない。しかし、これらの過半数の人々が少なくとも、人種主義的な発言を積極的に支持していないことは確かである。これは、アメリカにおいて、運動能力や身体力と人種カテゴリーの関係をめぐる、世論を二分する論争が存在することを示唆している。

以上のようなアメリカの出版物に対応する文献を求めて、日本の過去の資料を検索するものがおそらく発見することになるのは、こうした数値（割合や百分率のデータ）の大小ではなく、数値を導き出すとする努力の奇妙なまでの欠如である。昨今のサッカーW杯やオリンピックにおける黒人選手の活躍を、日本の研究者が見落としてきたとは考えにくいので、統計的データの不在は、この現象を目撃しながら、その原因を調査しようとするものがないことを反映しているものと思われる。この現象に対する関心が欠如しているのか、それともそれが希薄なのか。あるいは、調査対象とするだけの争点性が存在しないとの認識が定着しているのか。そのいずれも正しいのであろう。

こう考えるのは、日本の識者の議論が、黒人に特有の運動能力が存在するのか、だとしたらそれはいずこから生じるのかといった存在や起源を問うものでなく、それが存在することを当然視する世論のあり方や文化的環境を観察し



たり、それを批判したりする立場に極端に偏つてきたからである。このような傾向は、争点がなにかを問うのではなく、その不在を認定し、ある場合は不在であることを問題視してきたことのあらわれとみることができよう。

今から四〇年以上も前に、人類学者の我妻洋は『日本人の人種観』を著し、この分野での開拓的業績を残している。その中にある、異なる人種・民族に対する日本人の意見や印象についての実証的な調査結果に注目したい。彼は、西洋諸国民に対する意見の好意的、肯定的な方向への、そしてアジア・アフリカ諸国民に対する意見の非好意的、否定的方向への偏りを指摘し、幕末・明治維新时期に形成された観念や偏見が、戦後急速な経済成長を遂げつつあった社会にも根強く残っていることを明らかにしたのである。彼はここで、多くの日本人が黒人を「運動神経が発達している」とみなしているとの報告も残している。だがそれに異を唱えるものへの言及は皆無であり、またこの事実自体に対する批判も一切みられない。

一九九〇年代におけるジョン・ラッセルによる告発の書『日本人の黒人観』は、日本人の人種観を特に黒人に絞って論究したものである。<sup>15</sup> ラッセルも我妻の主張を踏襲し、黒人の運動能力に対する信念が多くの国民によって共有されていると論じるが、さらに一步踏み込んで、このような信念がステレオタイプの形成に結びつく状況に強い懸念を抱いている。彼がその原因の一つとして「マンガ」を挙げているのは注目に値する。曰く、「日本のマンガに登場する黒人はスポーツマンが圧倒的に多い」ために、「黒人スポーツマンという先人観を助長している」と。大衆文化としての漫画の浸透と定着に鑑みるなら、これは卓見といえるだろう。また今日における日本の漫画の海外での流通を考慮するなら、日本から発信される人種観が、世界の諸地域の人々に影響を及ぼす可能性もあるかもしれない。

今世紀になってから公表された意見の一つとして、山本敦久による『朝日新聞』の論考に注目したい。<sup>16</sup> 山本は、二〇〇二年初夏、日韓共催サッカーW杯の熱気溢れる中、報道に頻出するようになった黒人の「高い身体能力」とい

う表現に注目する。彼によれば、「さすがに、高い身体能力のなせる技です」など、この表現を含む解説を聞いても、「私たちには解説者と何ら共有できるピッチ上のプレーのイメージを抱けない」という。にもかかわらず、「いまやこの言葉は解説者の専門用語であることを越えて、日常のサッカー談議の中でも頻繁に使われる」というのである。

ここで興味深いのは、山本が、この現象を単なる一時的な流行ではなく、日本社会に巣食う人種的な偏見と関連づけて論じている点である。これは、ラッセルに共通する姿勢である。山本は、この表現を用いる話者や書き手が、意識的、無意識的を問わず、「そのプレーの視覚的表象にあらかじめ人種（差別）的な認識の枠や境界線」を引いていると主張する。そして、この境界線の一方に、「ゲルマン魂」の象徴としてはやされた独ゴールキーパーのオリバー・カーンに代表されるヨーロッパ諸国の選手がおり、もう一方に「高い身体能力」を誇るアフリカ人選手がいるとする。反対にヨーロッパ人選手の身体力や、アフリカ人選手の精神性が問題とされることはほとんどない。それは、山本の言葉を借りるなら、『スピリット／身体』という境界線が、『白人／黒人』、『ヨーロッパ諸国／アフリカ諸国』という境界線」と重なっているからにほかならない。

我妻、ラッセル、山本の議論に通底するのは、黒人に固有な性質や能力として、スポーツ競技などによって具象化される身体性や身体力を挙げる傾向が日本人に強くみられるという指摘であり、それぞれが自説を発表した時代枠に鑑みるなら、この傾向は戦後の日本社会に持続的に存在してきたものといえるだろう。

本節で取り上げた文献の執筆者の意図をどう読むにせよ、全体として日米間に顕著な立場や論調の相違がみられることは明白である。アメリカにおいては、黒人が固有の運動能力、あるいはそれより広い意味での身体的な力を有するかどうかをめぐって世論が、三対七から五対五の割合で分裂していること、他方日本においてはそれが争点たりえず、むしろ所与の想定として、半世紀近くに渡って安定的に維持されてきた観のあることは明らかである。

上で述べた、日本人の意識と言動に関する比較的な視座を構築するための研究における主題を、本節で概観した文献にみられる意識差を踏まえて言い直すと次のようになる。

すなわち、「人種」概念の科学的根拠が否定されて久しいにもかかわらず、日本人の間に今日なお、黒人に固有の運動能力があるとする想定が蔓延しているのはなぜか。とりわけ、アメリカにおける世論や言論と比べた場合に際立つ、日本に特徴的な表象や言説のあり方は、なぜ、いかにして形成されてきたのか。本論に残された課題は、これらの問いに答える作業の足場を築くために、主要な概念を規定し、方法論を概略することである。

#### IV 概念規定…「黒人身体能力」と「神話」

二つの国家において、黒人に固有の運動能力があるという想定が、いかなる形態でどのように受け入れられ、あるいは批判されるのかを検討するには、文化的差異を越えてこの想定を一貫した枠組で捉えることが不可欠となる。そのためには、異文化間の言説や表象に通底するテーゼを的確に把握する概念が必要である。

黒人に固有の運動能力があるとする想定は、「黒人はスポーツがうまい」のような平易な表現から、「黒人には特有の身体能力がある」のような、意味の曖昧な「身体能力」という概念を導入することによって成り立つ表現まで、いくつかのパターンのもとに言説化され、また表象となる。この時「スポーツがうまい」や「身体能力がある」という性質が、先天的なものか否かについては、肯定的に言明される場合、言外に暗示される場合、一切示唆されない場合がある。こうした発言として表明される意識のあり方の差異をどのように整理するかについては、節を改めて論じるものとする。ここでは、能力の原因や起源をどう考えるにせよ、アメリカの場合、この想定が「アスレティズム

(athleticism)」という語によって、表明されることが多いということを確認したい。この語は、時には「ブラック (black)」という語との組み合わせによって、直接的に「黒人固有の運動能力」を意味することもある。

最近「アスレティシズム」という言葉を耳にした機会の一つとして、多くのアメリカ人映画ファンと、日本人スポーツ映画ファンを虜にした二〇〇四年封切のハリウッド作品『ブライド・栄光への絆』の次の場面を想起したい。<sup>17)</sup>

実話に基づいた映画は、テキサス州の田舎町オデッサにあるパーミアン高校のアメリカンフットボールチーム、コーチのゲインズ率いるパンサーズの一九八八年のシーズンの軌跡をたどるドキュメンタリー風の作品である。九月、シーズン初戦マーシャル高校との試合で、黒人選手ブービー・マイルズがランニングバックとしてフィールドを縦横無尽に走り回り、ポイントを量産する。その快走ぶりを描写するナレーションに次の一節がある（和訳は字幕のもの、英語は英語字幕のもの）。

ブービーはすばらしい (Boobie Miles has it all, all in one great package)。

その速さと体格と反射神経 (the speed, the size, the athleticism)。

プレーを見れば、入場料も高くなさ (Let me tell you, folks, Boobie Miles is worth the price of admission)。

またもやブービーの独走 (Boobie Miles breaks in loose one more time...)

字幕は、“athleticism”の訳として「反射神経」を充てている。これが適訳かどうかは後で吟味するものとし、ここではこの単語が、「速さ」や「体格」とならんで、優れたアスリートの資質を描写する表現として用いられていることに留意したい。これだけからも、いかなる日本語を充てるにせよ、以下に見るようなイギリスでもとも用いられ

た社会的な風潮や動向を表す語法とはかけ離れた意味で用いられていることは明らかである。<sup>(18)</sup>

イギリスにおいてこれまで用いられてきた意味での「アスレティシズム」に馴染んできた人々は、『プライド』でのこの語の用法に、まず違和感を覚えるであろう。元来この言葉は、一九世紀後半のイギリスで誕生した語とされ、例えば一八七〇年の『デイリー・ニューズ』という新聞の記事に、もつとも早期における用法を見ることができ<sup>(19)</sup>。それによると、当時のパブリック・スクールや大学において前例のないほど、生徒や学生がスポーツに熱中する現象がみられ、それを「アスレティシズム」と呼んだというのである。

この意味では、例えば『リーダーズ英和辞典』にみられる「運動競技熱」や「スポーツ熱」との訳語が適切であるといえる。しかし、繰り返しになるが、現代においては、アメリカではもちろんイギリスでも、とりわけスポーツ報道やスポーツファンの会話の中では、『プライド』にみられるような用法のほうが明らかに主流である。その点では、イギリスが現代アメリカ流の「アスレティシズム」を逆輸入しているようである。新しい意味での用法を、具体例を引用しながらさらに検討してみたい。

一例として、一九九七年のNYT（『ニューヨーク・タイムズ』）紙に掲載されたジャッキー・ロビンソンに関する記事がある。<sup>(20)</sup> その中に、この「黒人初」の大リーガーを形容する次の一節がある。‘Jackie Robinson, with his reckless athleticism, his peculiar pigeon-toed gait, was a moral example.’（「向こう見ずなアスレティシズムと、独特の内股走法で知られるジャッキー・ロビンソンは、道徳的にもお手本となる人物であった。」）

それから二年後に『エマージ』は、NFL（全米フットボール連盟）で黒人クォーターバック（QB）が増加する傾向に関する記事を発表した。その中で、数少ないNFL黒人重役の一人、ボルティモア・レイブンズのジョン・ウーテンは、新しい時代を「機動的QBの時代」と呼び、こう語<sup>(21)</sup>った。‘We’ve [Black players] always had the

athleticism. These guys have that rifle, too. They also have that quarterback quality...to read the defenses. All these guys can make it.”(「われわれ黒人選手は、常にアスレティシズムに恵まれてきた。だが彼ら(新しい時代の黒人QB)には強肩も備わっている。その上に、ディフェンスの動きを読むというQBとしての素質もある。彼らはみんな成功するにちがいない。)」

同年のNYT紙は、NBA(全米バスケットボール協会)のサクラメント・キングスの新人選手で、ガードを務めるジェイソン・ウィリアムスが、「白いチョコレート」との愛称で呼ばれるに至った理由を、こう分析する。<sup>(23)</sup>「The nickname is meant to play on the fact that Williams, who is white, plays with an athleticism and hair that over the years have come to be associated with black players.”(「この愛称が使われるようになったのは、ウィリアムスが、白人であるにもかかわらず、これまで長年をかけてわれわれが黒人選手のものともみならずようになったアスレティシズムと才能をもっているからである。)」

二〇〇〇年の『フィラデルフィア・マガジン』では、ジョン・エンタインが、第二次世界大戦後のアメリカにおけるバスケットボール界に見られた変化として、ユダヤ系の人々が他に成功の道を開拓したことによる選手人口の減少を挙げる。そして、その結果をこう記述している。<sup>(24)</sup>「[The stereotype of the “scheming” and “trickiness” of Jews was replaced by that of the “natural athleticism” of blacks.”(「陰謀好き」かつ「油断ならない」ユダヤ人というステレオタイプは過去のものとなり、新たに『天性のアスレティシズム』を備えた黒人というステレオタイプが誕生した。)」

同年にNYT紙は、アフリカのジンバブエにおけるテニスブームについて報道している。同国は貧困を抱えつつも、「四つのテニスコート」と打ち返し用の壁を建設し、この競技の普及に努めていた。その様子を同紙はこう記述する。<sup>(24)</sup>

“On this oasis of athleticism, there were kids with big smiles hitting forehands, and a few of them had bare feet.”  
 「このアスレティシムのオアシスにおいて、子供たちは笑顔をみせながら、フォアハンドの腕前を見せつけていた。  
 その中には裸足の子供もみられた。」

「アスレティシズム」の現代的意味を検討するために、いくつか事例を挙げてきたが、念のためにもっと最近のものをあと二点ほど紹介したい。その一つは、二〇〇四年の『ブラック・エンタープライズ』誌が組んだ、同年のアテネ五輪に出場した黒人フェンシング選手の特集である。それまで白人の独壇場とみなされていたこの競技に挑戦する黒人アスリートが、同誌記者は“promise to perform at the highest levels in a setting that combines athleticism, discipline, and sportsmanship”（「アスレティシズム、鍛錬、スポーツマンシップのすべてが要求される舞台において、もっとも高いレベルで競技するにちがいない」）とみなして、多くの期待を寄せている。<sup>(26)</sup> もう一つは、〇五年の『ウォールストリート・ジャーナル』紙からである。その中で同紙は、バスケットボールにみられる白人スタイルと黒人スタイルとを比較する。前者は「古典的な水平方向のバスケットボールであり、それが後者の“vertical ball, featuring dunking, slashing to the basket and other displays of athleticism”（「バスケットにボールを放り込むダンクシュートや、その他の手段によるアスレティシズムの見せつけを特徴とする『垂直方向の』バスケットボール」）に取って代わられたとされる。<sup>(26)</sup> そして最後の例は、ドイツでのサッカーW杯に出場するガーナチームを紹介した『US 連邦サービスニュース』からである。アメリカチームの対戦相手となることすでに決定していた同チームの特徴を、専門家の言葉を借りて、“Ghana’s team, nicknamed the ‘Black Stars,’ is ‘very, very good’ because of the players’ ‘athleticism’”（『黒い星』との異名をもち、選手それぞれがアスレティシズムに恵まれているので、『とてもとても強く』）と記述している。<sup>(27)</sup>

以上の例が示唆するように、「アスレティシズム」は黒人との関連で頻繁に使用される言葉である。むしろ、黒人以外の人種・民族集団との関連での使用が見られないというわけではないが、一般的な傾向としてそうであることは、より多くの文献による検証によって証明することも可能である。また、スポーツのような身体運動における優秀さを語る文脈で用いられていることもわかる。もう一つ注意したいのは、この言葉が、ジェイソン・ウィリアムスの記事で「天賦の才能」というニュアンスのある“fair”と同格で並べられたり、ユダヤ系の記事で“natural”という修飾辞を冠されたりしていることからわかるように、本質的、あるいは生得的な性質であるとの含意を伴う場合が見られることである。

ただ、これを映画『プライド』の字幕のように「反射神経」と訳してしまうと、この言葉のもつ広がりや汎用性を無視して、狭い意味に限定してしまう危険がある。それゆえ、むしろ優れた運動能力を、広く、一般的に含意する言葉とみなすべきであろう。ただし、「運動能力」としていいのかどうかは、次にみる日本語文献の事例と照らし合わせて吟味する必要がある。

山本の警告からもわかるように、日本の報道では、黒人に固有の運動能力があるとの言及がなされる文脈や状況で多用される語句は、「身体能力」である。過去における主要三新聞での使用例を取り上げながら、この語句の用法や、使用される文脈を概観してみたい。

末続慎吾が二〇〇Mで銅メダル獲得という快挙を成し遂げた二〇〇三年のバリ世界陸上選手権、その最中の報道で『日本経済新聞』は末続が決勝へと勝ち進む過程を、期待を込めて追跡している。一次予選、二次予選と勝ち残るにつれて、「世界の末続を見る目も変わってきた」と伝え、その直後に、「黒人選手に身体能力で劣る日本選手が、百メートルや二百メートルでメダルを獲得することは、夢でしかないと思われてきた」との解説を加えている。<sup>28</sup> その三年



後、サッカーJリーグ一部のFC東京は、元コスタリカ代表のパウロ・ワンチョペを獲得した。ワンチョペは、ドイツ杯でドイツチームを相手に二得点を挙げるなど、輝かしい経歴を誇る有力選手だった。ワンチョペの特徴を同紙は「黒人特有の高い身体能力を生かしたプレー」の持ち主と記述している。<sup>(29)</sup>

二〇〇二年のサッカーW杯もたけなわの頃、『朝日新聞』は作家戸井十月のセネガル戦観戦記を掲載した。セネガルはアフリカ大陸西部の位置し、ここから南が「黒人たちの住む『ブラックアフリカ』」と書き出し、戸井は、セネガルがヨーロッパの強豪スウェーデンを破った試合にふれて、「アフリカらしい持ち前の身体能力で、組織に頼るスウェーデンを振り切った」と述べている。<sup>(30)</sup> 〇六年のトリノ冬季五輪では、スピードスケート競技でのシャニー・デービスの活躍が耳目を集めた。彼は、同種目で黒人初の金メダルに輝いたのである。その榮譽を称える記事で同紙記者は、富士急の長田監督の「あの身体能力があつて、あのコーナーのうまさがあれば、だれもかなわない」という言葉を引用している。<sup>(31)</sup>

『読売新聞』は、スポーツ医学における「革命」と呼ばれる大きな技術革新についての記事で、日本陸連科学委員会バイオメカニクス委員会を紹介した。同班は、トップアスリートのフォームを生体力学的に分析することで、世界のトップに達する選手の育成も不可能ではないとの信念を持ち続けてきた。小林班長は、「科学的トレーニングの開発で、身体能力にたけた黒人選手を日本選手が破る日もいつか来るはず」と語った。<sup>(32)</sup> 同紙は、二〇〇二年W杯が近づくと、日本との対戦が決まったベルギーチームに注目し、そのキーマンの一人であるフォワードのL・エムベンザについて、次のように記述した。「一九歳で九八年フランス大会に出場し、黒人特有の身体能力の高さとスピードをアピール」する。<sup>(33)</sup>

これらの例から、日本の報道が「身体能力」なる言葉を使用する文脈の一つがくつきりと浮かび上がる。それは、

陸上、サッカー、スピードスケートのような激しい運動と体力を要求するスポーツ競技において、「黒人」として認識される選手の能力の高さ、あるいは日本人と比較した場合の相対的な優位を示唆する場合である。この時、「身体能力」とは何かについて特別な説明や定義を与えず、むしろ普通名詞として当たり前のように用いている。この点は「アスレティシズム」という言葉の使用に共通する特徴である。また、「身体能力」の記述には、「特有の」、「持ち前の」など、それが先天的か後天的かは問わないにせよ、あたかも深いレベルでかね備わった性質であるかの修辭語が伴う場合、あるいは伴わない場合でも、それがニュアンスとして含意される場合が少なくない。この点も「アスレティシズム」の使用に共通する点である。

山本の批判に照らすなら、こうした無定義の使用や、安直な前提にこそ問題があるといわなければならないだろう。だがいづれにせよ、ここでは「身体能力」が「アスレティシズム」ときわめて近似した文脈において類似した意味で使われていることに留意したい。また、「身体能力」と「運動能力」とに厳密な区別を設けることにあまり意味はないとはいえ、それでも報道での「黒人」という語との相性の良さに鑑み、本論では「運動能力」ではなく、「身体能力」にこだわりたい。

以上から、アメリカにおける「アスレティシズム」と日本における「身体能力」をほぼ同意のものとみなし、またそれぞれが頻繁に「ブラック＝黒人」という人物表象と組み合わせ用いられていることから、以下では、「黒人」として表象される『人種』に固有のものとみなされる「運動能力」という意味で「黒人身体能力」＝「ブラック・アスレティシズム (black athleticism)」を使い、略して「黒人身体能力」を用いるものとする。

もう一つの取り上げるべき概念は「神話」である。この概念を導入するには、黒人に生来の運動能力があるとする想定に対して、現代の科学者が突きつけている明快な回答を踏まえなければならない。「黒人アスリートの遺伝的、

先天的優越性を示唆するような科学的証拠はいまだ存在しない」というのがそれである。<sup>34</sup>しかしこれまでにみたように、この想定は社会に広く浸透し、一般人の会話で、あるいはメディア報道の言説として、日々繰り返し反芻され、再生産されている。そこで、科学的根拠が存在しないこと、しかし一つの言説として広く受け入れられていること、これら二つの点に鑑み、この想定を「神話」と呼び、本論が焦点とする黒人に固有の運動能力があるとする想定、すなわち黒人身体能力という想定そのものを、「黒人身体能力神話」と呼ぶものとする。<sup>35</sup>

## V 方法論

ここで本論を嚆矢とする研究の主題に話を戻したい。それは上で述べたように、「『人種』概念の科学的根拠が否定されて久しいにもかかわらず、日本人の間に今日なお、黒人に固有の運動能力があるとする想定が蔓延しているのはなぜか、とりわけ、アメリカにおける世論や言論と比べた場合に際立つ、日本に特徴的な表象や言説のあり方は、なぜ、いかにして形成されてきたのか」というものであった。前節で規定した概念を用いて、これを端的に言いなおすなら、日本に黒人身体能力神話が広く浸透しているのはなぜかということになる。この点を明らかにするための方法論を記述することが、本節の目的である。

ここで述べている想定は蔓延や、表象や言説の形成が、一夕一朝に成されたわけではないことは自明である。本研究がインフォーマンとして焦点を置く大学生人口にも、神話は広くかつ強く支持されていることから、それが古い世代から新しい世代へと、時代を越えて継承されてきたことも確かである。そこで、大学生の観点に立って、自分たちがこの世に生を受けてから現在まで、いかにしてこの想定を獲得し、言説や表象を受容してきたのかと、問い直してみ

たい。その上で二〇年間あまりのそれぞれの人生において、神話と遭遇し、その影響を受ける上で重要な段階や制度を特定し、それぞれについての経験の実際をアンケートと聞き取り調査によって掘り起こす作業をおこなうこととする。

神話との遭遇や交渉が展開する上で主要な位置を占める人生の段階と制度について、試験的な聞き取り調査の結果を踏まえて、以下の四つの問題領域を設定するものとする。

その第一は、インフォーマントが実際に黒人といつ、なぜ、いかに出会い、いかなる関係を持ったかである。幼少期におけるこのような経験は、神話と相対した際の立場や態度の決定に少なからぬ影響を与えたものと推測できる。第二は、インフォーマントが「人種」および「黒人」という言葉・概念をいつ、なぜ、いかに出会い（聞き）、これを習得して、使用するに至ったかである。これは普通、第一領域での経験より後に発生したものと考えられるが、実際の経験を整理し、理解する上で不可欠のプロセスである。第三は、第二の領域と深く関わるが、その制度的側面に重点をおいたものである。すなわち、インフォーマントが「人種」および「黒人」という言葉・概念を、学校制度による教育カリキュラムを通じて、いつ、いかに学んだかである。そして第四は、インフォーマントが黒人身体能力神話を、いつ、なぜ、いかに受容あるいは拒絶するに至ったかである。この領域における経験としては、特にテレビ、雑誌、映画その他様々なメディアが極めて重要な役割を果たしている。以上の四つの領域における経験を掘り起こすために具体的かつ簡明な質問を用意し、まずアンケートによって回答を得た後、聞き取りによって、その回答の内容を確認し、さらに詳細なる回答を得ることができた。

インフォーマントの選定にあたっては、本研究の主眼が日本における神話の浸透度にあることから、日本の学生から多くのインフォーマントとしての協力を依頼した。しかしタイトルにあるように、文化的格差を考察する試みもか

ねていることから、相当数のアメリカ人大学生にも協力を依頼した。アメリカ人学生の経験は、参考として、日本人学生の経験を相対化するために随時言及するものとする。<sup>(36)</sup>

次に方法論の具体的な手続について述べておきたい。インフォーマントとして協力を得たのは、日本の三大学（J1、J2、J3）に所属する三四名<sup>(37)</sup>およびアメリカの一大学（A1）に所属する二名<sup>(38)</sup>の計五五名である。調査は、アンケート票を配布し、一定の期間の後に回収するアンケートと、回答者にアポをとり、一人当たり一時間前後の間を使って行う聞き取りの二段階で実施した。アンケートは、本人に直接、あるいは友人・知人を介して趣旨説明書を配布し、同意を得たものに依頼した（回収率一〇〇%）。アンケート票は一七ページに及ぶもので、回答には平均一時間が費やされている。<sup>(39)</sup> 聞き取りはアンケート回答者五五名のうちの五一名に対して実施し（実施率九二・七%）、聞き取り内容は、同意を得た上でICレコーダーに録音した。

人選にあたっては、筆者が籍を置く大学とそれ以外で、異なる手続きをとった。筆者が籍を置く大学では、講義や演習を通じて知り合った学生のうち、信頼できると判断した学生に逐次依頼し、同意を得たものを対象とした。他の大学では、各大学の教員に調査の趣旨を説明した後、信頼できる学生を紹介してもらうという手順によった。科学的なサンプリングの手法によったわけではないが、ジェンダー、人種・民族的アイデンティティ、出生地などの点でインフォーマントに偏りが生じないよう極力配慮した。

本節を結ぶに当たって、本研究の制約および限界について付言しておきたい。

本研究が限られたサンプルに基づく試験的な試みにすぎないことはいうまでもない。その意図は、日米社会の一般特徴を議論することにあるのではない。<sup>(40)</sup> 本研究の目的はあくまでも、それぞれの社会に生きるインフォーマントから得られるデータに基づいて、比較文化的な試論を提起することである。殊に、アメリカ人インフォーマントがみな

一つの大学に所属し、その数も少ないことに鑑み、分析の主眼は日本の側に据え、アメリカの事例は参考として提示する方針で一貫するものとする<sup>(4)</sup>。同様に、人数と所属する大学数が若干多いとはいえ、日本人インフォーマントの経験が、日本人や日本社会一般に敷衍しうる性質のものであるという根拠は存在しない。本論の射程が、アメリカの大学と日本の三大学に所属する学生の経験に限られるものであることはいうまでもない。

かく留保した上で、本研究の分析が、より大きな世界における言説や表象の浸透や受容の度合を考察するための、より精緻な方法論に基づいた作業にとつての端緒を開くものとなることを期待したい。ちなみに、黒人身体能力神話に対する意識に見られる日米インフォーマント間の比率の差異は、すぐに述べるように、前節で紹介した文献資料から導き出した日米間のそれときわめて類似している点は、注目に値する。このような類似が、黒人身体能力神話に対する意識に限られるのか、それとも調査の内容全体にまで及ぶものなのかは、現時点では不明である。しかし今後、調査を継続する中で、少しずつ明らかにしていきたいと考える。

### むすびにかえて——現在における日米大学生による神話受容度の差異——

第三節で論じた文献の分析は、主として一九九〇年代における神話浸透度の日米間差異を俎上に載せるものであった。それでは、その後この差異に変化はみられたであろうか。上で説明した調査で得られた結果のうち、手がかりとなる部分を抜粋しながら、この点についての示唆を与えることで、本論を結ぶものとする。

方法論で設定した四つの問題領域のうち、神話の浸透度と直接かわるのはその第四、すなわち、インフォーマントが神話をいつ、なぜ、いかに受容／拒絶するに至ったかである。調査では、この中でインフォーマントの現時点で

の神話に対する立場を直截に問う必要があつたが、目的の単純さとは裏腹に、その達成のためにいかなる質問を設定するかは難題だった。「黒人身体能力神話を信じますか」が愚問であることは言うに及ばないが、「黒人は生まれつき運動能力（あるいは）身体能力に恵まれていると思いませんか」のような一見平易な文章も、「生まれつき」「運動能力」「身体能力」など、定義が一元的に定まらない概念が含まれているため、質問の受け手の主観によるぶれが生じること避けられないように思えた。試行錯誤の結果、アンケート票の質問は簡潔明瞭であれという、社会調査の基  
本に立ち返り、次のような三択を設定するものとした。

- 一 アフリカ系の人は他の民族集団と比べてスポーツが下手である
- 二 アフリカ系の人は他の民族集団と比べてスポーツが上手である
- 三 どちらでもない

これらの選択肢は、神話の浸透度を測るための基準そのものではなく、それを測るための調査の入り口の役割を果たす手掛かりとして設定したものである。これらのいずれを選択するかをみて、インフォーマントの基本的立場を押しつけた上で、聞き取りによって神話に対する立場に関する、より詳細かつ具体的な情報を聞き出し、それを踏まえて分類を試みたのである。その結果は次の通りである。

まず一を選択したものは、いずれの国においても一人もいなかった。「アフリカ系の人」を「アジア系」（アメリカ人にはアジア系が運動音痴であるというステレオタイプがある）、「日本人」（日本人大学生の多くは、日本人が身体能力で外国人に劣ると信じている）、あるいは「インド系女性」（イギリスにはインド系女性はスポーツが下手という

ステレオタイプがある)に置き換えた場合どうなるかを考えると、一人もいなかったという事実そのものに、神話の影響力を看取することも可能であるかもしれないが、この点についての検討は別の機会に譲るものとして、ここでは論を先に進めたい。

二を選択したものは、聞き取りの結果、「スポーツ全般において上手である」と認めるものと、「特定の競技(たとえば陸上、バスケットボール、アメリカンフットボール)において上手である」と条件を付すものに大別できた。ここで想起したのは、第四節冒頭で紹介した、黒人は「スポーツが上手である」、「身体能力を有する」という表象や言説が成立する際に伴う、その理由が先天的なものであるかどうかに関する立場、すなわち先天的であることを、A肯定的に言明する、B言外に暗示する、C一切示唆しない、の三者である。インフォーマンをこれらの立場によって分類すると、「スポーツ全般において上手である」と認めるものは、このうちのAかB、「特定の競技において上手である」と答えたものは、A、B、Cのいずれかに該当することがわかった。

三を選択したものは、民族という属性がスポーツの上手下手を決めることはありえないとするものと、「特定の競技においては上手である」と譲歩するものに大別できた。先天性に関する立場で分類すると、前者はみなCに、後者はA、B、Cのいずれかに該当することがわかった。

以上をまとめると、神話に対する立場に関して大きく二つの集団を想定することが可能となる。その一方に、全般のであれ部分的であれ、黒人は他の民族集団とくらべてスポーツが上手であると認め、その理由として先天的な要因を肯定的に言明するか、言外に暗示するものであり、この集団を神話受容者とみなすことが可能である。もう一方に、民族集団によるスポーツの上手・下手はありえないとするものと、特定種目において黒人が他の民族集団よりも上手であるとは認めつつ、その理由として先天的な要因を一切示唆しないものからなる集団があり、これを神話批判者と



みなすことができるだろう。こうして神話に対する態度で、インフォーマントを受容者と批判者に分類することができる。その結果は、次の通りである。

A1大学で協力を得たインフォーマント二名中、受容者は九名、批判者は二名であり、J1大学、J2大学、J3大学で協力を得たインフォーマント三四名中、受容者は三二名、批判者は二名であった。A1大学のインフォーマントは受容者が四三%を占めていることになる。これは『スポーツ・イラストレイティッド』誌が明らかにした「白人よりも黒人のほうが体格がよく強い」と信じているものの比率三分の一より高く、『USAトゥデイ』紙が発表した「黒人は生まれつき優れた身体的な能力を有している」と答えたものの比率およそ五〇%（半数）よりも低い値である。が、いずれにせよ、本調査による結果は、第三節でみたアメリカの文献にみられる傾向と近似する位置にあるといえるだろう。一方、J1、J2、J3大学のインフォーマントは受容者が九四%を占めていることになる。これは、ラッセルや山本らが憂慮する、日本における黒人身体能力神話の無批判な受容を如実に裏付ける値である。総じてインフォーマントの神話受容度は、日米間で大きな開きがみられ、そのパターンは、文献調査が提示するものと合わせて類似しているといえることができるのである。

本調査は、アメリカでは争点ゆえに、日本では争点の不在ゆえに注目される黒人身体能力神話をめぐる環境が、アメリカでは少なくとも一九九〇年代以後およそ二〇年間、日本では少なくとも一九六〇年代以後五〇年間近くに渡って存続してきただけでなく、現在も不変であることを示唆しているといえるだろう。

(注)

(一) アフリカに出自を有する人およびその子孫のこと。一般的にはかつて奴隷として強制的に北米イギリス植民地あるいは初期のアメリカに連れ

- てこられたアフリカ人の子孫を指すが、ここでは、一九世紀初頭の奴隷貿易廃止後に、移民やその他の理由でやってきたアフリカ人とその子孫、または近年移民、就職、留学やその他の理由でアメリカに入学し、グリーンカード（永住権）を得たアフリカ出身者を含む意味で用いている。
- (2) U.S.統計局 (U.S. Census Bureau) にある二〇〇七年のデータによると、アフリカ系アメリカ人の総人口は約三七〇万人 (37,334,570) で、全人口の二・一三八%を占めている。同局による、2007 American Community Survey<sup>5)</sup> を参照。なお統計局は、自分がアフリカ系アメリカ人としてのアイデンティティをもつもの、つまり調査用紙にあるさまざまな人種・民族カテゴリーのなかで「アフリカ系アメリカ人」の項目をチェックしたものをカウントしている。
- (3) Johann Friedrich Blumenbach, *De generis humani varietate nativa (On the Natural Varieties of Mankind)*, MD thesis at University of Göttingen, 1776.
- (4) これらのいずれの呼称を採用するかは、アメリカ人の間においても合意がみられないようである。筆者は北米スポーツ社会学会 (North American Society for the Sociology of Sport, NASSS) で発表者の採用する呼称に注目し「みた」として、「African American」が最も多かったが、「people of color」や「black(s)」も少なからず用いられていた。教室など公の場では African American を用いるのが一般的だが、私的な場では black(s) が好んで用いられる傾向がある。
- (5) 例えば日経新聞のオンライン検索エンジンである「日経テレコン二」で検索すると、オバマと「黒人」という表現を両方用いている記事が、当選が決定した二〇〇八年一月五日から六日に集中して掲載され、その後急激に減少する傾向を確認することができる。
- (6) 「運動能力」と「身体能力」という二つの概念はどう区別されるべきだろうか。運動能力を、スポーツ（運動競技）をおこなう能力を意味するものとも一般的な概念であるとするなら、身体能力は、「フィジカルな力」などとも言え換えられ、スポーツを行う能力のうちの身体に直接関連、または由来する部分を強調した概念である。もう一歩踏み込んでいえば、運動能力がスポーツを実践する能力の文化的、環境的要因に由来する側面も包含するのに対し、身体能力はその本性的、生得的側面を特化させる概念であるともいえる。本論ではこの点だけでなく、後の節で論じる点にも着目して、「黒人身体能力」という言葉を設定する。
- (7) 筆者が筑波大学大学院や東海大学に学んだ元短距離スプリンターから聞いた話では、トレーニングの現場では、黒人アスリートに天性の才能があることはむしろ当然視され、この点を疑問視する風潮は皆無であるという。末統慎吾が二〇〇三年にパリで開催された世界陸上選手権で銅メダルを獲得した当時は、彼の走りが日本古来のナンバ走法的应用であるとされ、日本人の技能が黒人の天性に勝る日が近づいた証拠としてもはやされた。
- (8) 大学の授業でたびたび「黒人は天性のアスリートである」との発言に潜む人種主義の可能性を指摘したことがあるが、当惑し、反感さえ抱く学生が少なくない。そのような学生が口にする反論としてもっとも多いのがここに紹介したものである。

- (9) 武蔵大学総合研究所プロジェクトAと同時に、科学研究費補助金による基盤研究C「アメリカ合衆国における黒人身体能力神話およびスポーツへの固執と対抗言説・戦略」も立ち上げた。前者が日本における神話の受容を踏まえた上で、アメリカにおける受容と批判の拮抗関係が及ぼす社会的影響に焦点を当てるのに対し、後者はアメリカにおける批判側の対抗言説・戦略が、神話をいかに覆そうとしているかを分析することをねらいとしている。
- (10) 人種概念の社会的構築性を検証する作業の代表例に、京都大学人文科学研究所を拠点とする「人種の表象と表現をめぐる融合研究」(代表者 沢泰子)がある。その業績の一つとして竹沢泰子編著『人種概念の普遍性を問う…西洋的パラダイムを超えて』人文書院二〇〇五年がある。
- (11) Jim Myers, "Race Still a Player: Stereotypes pit Ability vs. Intellect" *USA Today*, Dec. 16, 1991, p.01A.
- (12) Mel Elfin & Sarah Burke, "Race on Campus." *U. S. News & World Report*, April 19, 1993.
- (13) S. L. Price & Grace Cornelius, "What Ever Happened to the White Athletes." *Sports Illustrated*, December 8, 1997.
- (14) 我妻洋『偏見の構造—日本人の人種観—NHKブックス一九六七年
- (15) ジョン・G・ラッセル『日本人黒人観—問題とは「ちびくろサンボ」だけではない』新評論一九九一年
- (16) 山本敦久「サッカー解説『高い身体能力』って何」『朝日新聞』二〇〇二年六月三〇日朝刊
- (17) 映像はオデッサの町の景観の描写にはじまり、プレシーズンの練習風景、シーズン開幕と町の人々の興奮が高まる様子を追った後、初戦の試合模様へと移行する。この試合でブレイブ・マイルズは大活躍をするものの、選手としての致命傷となる膝靭帯の損傷を被ってしまった。ここで引用したセリフは、この試合の実況を中継するアナウンサーのものであり、映画の前半三分の一くらいのところに登場する。詳しくは映画『ブライド・栄光への絆』ユニバーサル・ピクチャーズ・ジャパン二〇〇四年を参照。
- (18) 黒人に固有の運動能力があるとの想定に焦点をあて、その社会的悪影響を多角的に論証した労作『ダーウィンズ・アスリート』の中で、著者 ジョン・ホバマンは、「ブラック」という概念と組み合わせ「ブラック・アスレティズム」なる語句を多用している。索引からだけでも、すくなくとも五四ものページで用いていることがわかる。本書が「アスレティズム」の今日的用法を普及させる上で果たした貢献度は見逃せなうものがあろう。John M. Hoberman, *Darwin's Athletes: How Sport Has Damaged Black America and Preserved the Myth of Race* (Manner Books, 1997). 拙訳『アメリカのスポーツと人種—黒人身体能力の神話と現実』明石書店二〇〇六年。
- (19) 山本浩「パブリック・スクールとフットボール」『現代スポーツ評論』三二二〇〇年三九
- (20) *New York Times*, Late Edition (East Coast), New York, N.Y., Apr. 15, 1997.
- (21) Rosslyn, *Emerge*, Vol.10, Issue 4, Feb. 1999, p.99.
- (22) *New York Times*, Late Edition (East Coast), New York, N.Y., Apr. 27, 1999.

- (23) John Entine, *Philadelphia Magazine*, Philadelphia, Vol. 91, Issue 1, Jan 2000, p. 37.
- (24) *New York Times*, Late Edition (East Coast), New York, N.Y., Feb 3, 2000, D1.
- (25) *Black Enterprise*, New York, Vol. 35, Issue 2, Sep 2004.
- (26) *Wall Street Journal*, Eastern edition, New York, N.Y., Mar 16, 2005, D10.
- (27) *US Fed News Service, Including US State News*, Washington, D.C., Feb 8, 2006.
- (28) 二〇〇三年八月二九日『日経新聞』朝刊
- (29) 二〇〇六年二月三〇日『日経新聞』朝刊
- (30) 二〇〇二年六月一七日『朝日新聞』朝刊
- (31) 二〇〇六年二月二〇日『朝日新聞』朝刊
- (32) 一九九八年三月二五日『読売新聞』朝刊
- (33) 二〇〇一年二月二五日『読売新聞』朝刊
- (34) Yannis P. Prisiadis, & Robert Scott, "The makings of the perfect athlete," *Lancet* 366, 2005, 516.
- (35) 「神話」については、より学術的な立場から、以下のような位置づけも可能である。周知の通り、近年において「神話学」なる学問体系の構築した貢献の多くは、ロラン・バルトに帰せられるべきであり、(二)での立論もバルトの学問に依拠することが可能である。バルトはその著書『神話作用』の中で、近代フランスにおいてブルジョワ的価値観が、社会的に構築されたものであるにもかかわらず、ブルジョワ階級がヘゲモニーを確立するにつれて、あたかも当然のものであるかの如くみなされるに至ったプロセスを検証し、それを「神話化」と呼び、結果として構築された価値観を「神話」と読んだ。ここでバルトが定義している「神話」の概念を用いて、「黒人身体能力神話」なる概念を構築することが可能である。ロラン・バルト(篠沢秀夫訳)『神話作用』現代思潮新社 一九六七年を参照。
- (36) 日本人インフォーマントの選定と、アンケート、聞き取り面調査は、二〇〇五年五月から七月に実施した。他方、アメリカ人インフォーマントに関する同様の作業は、同年九月から二〇〇六年三月に筆者が客員研究員として滞在した大学で実施した。以下で述べるとおり、一大学からのみのサンプルは、面調査の成果に基づいてより大きな社会を論じようとする際に大きな制約となることを否定できない。本研究は、この点の一つの理由として日本側についての議論を主として、アメリカ側についての事例を参考に留めている。
- (37) 東京にある中堅私立大学J1からの一八名、北陸にある元国立(独立法人)大学J2からの一二名、大阪にある中堅私立大学J3からの四名から成る。
- (38) A1は、北東部にある私立大学である。

(39) 「黒人」という表現に内在する問題性に鑑み、アンケート票では途中で「黒人」を「アフリカ系」と定義し直している。これが人種を表象する文言が引き起こす問題を回避する手段として最適かどうかは、なお検討が必要である。

(40) もちろんいかに厳密なサンプリングを行っても、社会や国家全体を論じることができると疑問は残る。しかし、このような質的調査であっても、現状よりは一般性を高める方策はあるものと考ええる。引き続き検討していきたい。

(41) アメリカ人インフォーマント二名は、一名の女性と二〇の男性からなり、八つのエスニック集団に所属し、一三の州・国家からの出身者からなる。その意味で多種多様な背景を負った人々である。しかし全員が一つの大学に在籍していることも事実である。したがって、これらのインフォーマントから得られる情報は、同大学のレベルやカラーを反映したものであることは否定できない。